

握った手を開き、未来を掴む

(ピリビ三・四〜一四)

「持つてる」で一世を風靡した甲子園のヒーロー。だがドラードに入ったプロの水は甘くなかった。甲子園で投げ勝ったマー君は今やピンストライプのユニフォームに身を包み大活躍なのに自身は二軍と一軍を往復中。果てはスポーツ紙も『持つてる』力をフル活用だ」と書きたてる始末。世間の風の冷たさを感じずにはおれない。

閑話休題。先週も話したが「誰が神の民に属するのか、そのしるしは何か」という問いは一世紀のキリスト教会にとつて喫緊の課題であった。それはイエスを信じる信仰のみなのか、それに加えてユダヤ教の割礼や食物規定を守ることも含むのかという問いへの答えを彼らは求めていた。これに対するパウロの答えは当然「キリストのみ」であり、今朝の箇所では自らの生き様を事例にしてそれを教えている。以下三つのことを考えたい。

一、「持つていた」パウロ

「使徒の働き」によればピリビ教会は

異邦人の女性ルデアの回心から始まった群れであった。そう考えるとピリビ教会の構成員の多くは異邦人キリスト者だったと考えられる。つまりユダヤ人キリスト者から見れば、彼らは割礼も無く、食物規定も守っていない、「持つていない」人々であり、それゆえ信仰の正統性は疑われていた。そんな彼らを弁護しようとパウロは口を開くのだが(四節)、なんと自らがどれだけ「持つている」かを列挙する。パウロはどこぞの馬の骨ではなかった。由緒正しいユダヤ人の血統であり、また神の律法の学びにおいても当時ユダヤ人の中で主流の位置を占めるパリサイ派に連なるものであった。更に彼は律法の義、つまり割礼や様々の宗教儀礼の実践において全く落ち度のない者であったと豪語した。こう言えばさしもの批判者たちもパウロ自身が持つてるものについては認めざるを得なかったろう。しかしこのひけらかしにも似た自己主張は七節において一変する。

二、「捨てた」パウロ

そのように「人間的なもの」を持ちあげたパウロは一転それらを「損」と思うようになったと主張する。なぜか。それは彼がキリスト・イエスに出会ったからである。それどころかかつては誇りに思っていた数々のものを、今やちりあくたと思つて

るといふのである。ちなみにある子供向けの聖書ガイドでは「ちりあくた」が口語訳では「糞土」と訳されていることから「こみやうんち(！)」と解説しているがそれは行き過ぎ。パウロが言いたかった内容に糞尿のことは含まれていない。もっと単純に「ゴミ」と解するのがよい。「ゴミはゴミ箱△のことはの通り、今や彼は今までしつかりと握りしめていた数々のものを手放し、同時に「俺は持つてる」という呪縛から離れて身軽になったのだ。今や彼の手は開いている。そう、開かれた未来を握る準備が出来たのである。

三、「掴もうとする」パウロ

握りしめていた人間的な誇りを捨てたパウロの手は一体何をつかもうとしたのだらう。答えは一つ。イエス・キリストである。ここは実に大切なところである。一面においてパウロはキリストが自分を捕らえてくれたことを認めている。またキリストが彼を捕えたのはパウロが死者の中からの復活(一一節)や終末において与えられる神の栄冠(一四節)を得させるためであることを知っている。しかし彼はそれが未来の事象であることをよく承知している。だからこそ人間的な誇りを一切合財捨てきった彼はキリストを追求するようになったのだ。映画『イー・ジー・ライダ

ー』の冒頭で、ピーターフォンダ扮するキャプテン・アメリカが束縛を象徴する時計を投げ捨てるシーンがあるが、もしそこで映画が終わったらそれこそお話しにならない。信仰も同じだ。古い価値観を投げ捨てるに留まらず、そこから真のものを探して旅に出ることが大切なのだ。パウロの証しはそれをよく教えている。

* * *

二度目の卒業式のこと。学友且つ悪友のポビーがとんでも無い事をやらかした。卒業証書を焼いたというのだ。「そんなバカなことを」と言つた私に「そう言うと思った。でも学位は俺にとつてはもう過去のこと。縛られたくないんだ」という彼の目は悪戯っぽく輝いていた。派手好き、遊び好きだったから彼の素行には眉をひそめる人達も多かった。だが深く付き合ってみると、その背後には確かに神に対する真実があった。二年後の春、親友からのメールでポビーの死を知つた。脳腫瘍だった。葬儀の席で三度に渡る手術との闘病生活の中でなお個人伝道を続け、病床ではタイの教会に匿名で献金をして支援していたことが明らかされたという。彼もまたキリストを得るために人の誇りを捨て、走り続けたキリスト者である。友よ、あなたはどうか。